

被災地の高校生の生と性に対する想い

一生と性を伝える活動から見たものー

神崎真姫* 酒井ひろ子**

*まひめ助産院 **森ノ宮医療大学保健医療学部看護学科

Thoughts about Life and Sexuality among High School Students in Disaster-Stricken Areas: Evidence from Activities Expressing Students' Views on Life and Sexuality

Maki Kanzaki* Hiroko Sakai**

*Mahime Maternity Home

**Morinomiya University of Medical Sciences Department of Nursing

<要旨>

大災害による思春期の子どもたちのトラウマ体験は、災害後に心的外傷後ストレスとして知られている困難を継続させる可能性があることを先行研究は示している。

東日本大震災で被災した子どもたちは、命の脅威にさらされ、その後も被災生活を送る中で、自分たちの生きる意味や死について考える機会が多かったと推察する。

東日本大震災発生から1年4か月が経過した時、被災地の高校1年生を対象に「生と性」をテーマに保健講話する機会を得た。

講話後のアンケートにおいて、対象者は「生とは」、「性とは」、「生きるとは」、「死とは」の4つの項目の問いかけに対し、心に思い浮かべる像や情景を自由記載した。自由記載に記載された言葉から得られたそれぞれの内容を狭義のKJ法で図解化し、考察した。図解化の結果、彼らが、有限性の命の重みを大切にしながら、豊かな人生やより良い生き方を追求しながら、自分らしい生き方や人生を送りたいという思いが表れていることが解釈できた。

被災経験は、対象者自身、そして身近な人々の多くの命が危険にさらされたトラウマ体験であるが、被災を経験した子どもたちは、生きている意味を考え、「より良く生きなければ」という意識を強く持っていることが明らかとなった。

< Abstract >

Previous research indicated that adolescent who experiences a disaster may develop ongoing difficulties known as posttraumatic stress disorder (PTSD) in post-disaster.

This exposure to a disaster can be an extremely traumatic experience once the children become adults. The Great East Japan Earthquake threatened the lives of children and it presumably provided numerous opportunities for children to ponder death and the meaning of their own lives while they were living in shelters.

A year and four months after the Great East Japan Earthquake, I had the opportunity to give a lecture on health on the specific topic of "life and sexuality" to high school freshmen in an area stricken by the earthquake.

A survey was conducted after the lecture. Respondents were asked to give open-ended answers to 4 questions, "What is life?", "What is sexuality?", "What is living?", and "What is death?", and responses to those questions described the scenes and images that each term conjured up.

I took the various contents gained by the freely-posted words and diagramed them within the confines of the KJ method, examining them. From the diagram, I was able to ascertain that they, while valuing the importance of life's finiteness, and pursuing a richer life and better lifestyle, wish to live with individuality. In their experience as disaster victims, the subjects and those around them being subjected to danger has inflicted trauma, however it is clear that the children who experienced the disaster contemplate the meaning of their lives, and have a strong will that they must improve their own lives.

キーワード	
被災者	stricken people
高校生	high school student
KJ法	KJ method

I. 緒言

大災害による思春期の子どもたちのトラウマ体験は、災後の発達段階において人格形成や成長発達にも影響を及ぼすことが先行研究によって述べられている。

災害を経験した思春期を対象とした先行研究(2000)^{1)~4)}は、Post-Traumatic Stress Disorder (=以後 PTSD と記す)を重症化させるリスクは震災経験前の家族関係、災害に対する主観的認識が影響要因であることを示し、災害後の PTSD の回復過程が、震災後の生活への適応、ライフイベント、社会支援の享受と関連する事を示している。また、災害で命を脅かされる経験をした子どもの衝撃は長期にわたり心理に影響を与えることが国内外で明らかにされている^{5)~7)}。さらに、震災後の生活への適応過程で、思春期の子どもたちの中には、無防備で危険な性行動をとる傾向を示し、性に対する支援の必要性について示されてきた(有園(2008)⁸⁾)。アメリカ国立 PTSD センターの「サイコロジカル・ファーストエイド」(2006)⁹⁾は、外傷性悲嘆に関連した対応の中で、思春期の子どもの無防備で危険な性行動に対する危険性を理解した上での支援の必要性を示している。

すなわち、災害などの命を脅かされる経験をした子どもの PTSD を長期化させないためには、子どものリスク要因を把握し、早期から生活に適応できるような支援とともに、命や性に関する健全な捉え方が出来るような長期にわたる支援が必要である。

我々は、東日本大震災から震災復旧復興期の静

穏期・準備期に入った1年4か月後、被災地である M 県 K 高等学校より依頼を受け、被災地における高校1年生を対象に①妊娠と避妊、②出産と中絶、③性感染症、④ドメスティックバイオレンスを含む内容で構成した講話を実施する機会を得た。

講話を実施するにあたり、対象者が生や死、性についてどのような想いを持っているかを確認するために、講話後にアンケートを実施し、そこから対象者らの想いやその言葉の意味を考察した。

本研究は、トラウマ体験を経験した1年後の子どもたちの想いと、トラウマ体験をした子どもたちへの支援について検討することを目的としている。

II. 研究方法

2011年3月11日に発生した東日本大震災発生から1年4か月後に被災地区での支援活動の一環として、高校生に対して保健講話活動「生と性」を実施した。

講話は1限目の40分間行い、講話後、午後や放課後に無記名によるアンケートを行った。

対象者は、M 県の被災地区である高等学校1年生121名、そのうち114名から回答が得られ、回収率は94.2%であった。

アンケートの内容は、対象者がイメージする「生とは」「死とは」「性とは」「生きるとは」の4項目について自由記載のアンケートを実施した。

4項目は、平成8年、あしなが育英会震災遺児家庭に対するインタビュー意識調査(1997)¹⁰⁾の結果から、被災した子どもたちから、「人生の意味を考え

る様になった」「生と死についてまじめに考える様になった」という回答が得られたこと、内見ら (2010)¹¹⁾ が、「危機的状況を上手く切り抜けたことで危機がその人の成長する機会となったことを示唆している」と危機状況において健康的な解決策を採用した場合の成長促進可能性について指摘している。また、震災後の生活への適応過程で、思春期の子どもたちの中には、無防備で危険な性行動をとる傾向があることを示唆した (有園 (2008)⁸⁾) ことから、「生」、「死」、「性」、「生きる」について概念構築を行った。

アンケートを配布する際は任意のアンケートであることを伝え実施した。

各担任の教員より配布されたアンケート用紙に自由記載し、郵送回収した。

その後、アンケートの文言をラベル化し、狭義の KJ 法によってラベル群を図解化し、対象者らの想いを構造化して考察を加えた。

図解は、質問項目ごとにラベル群を KJ 法図解化し、4 つの図解を作成し、考察を行った。図解の考察については、信頼性を高めるために、母性看護学を専門領域とする筆者と教育学を専門領域とする 2 名の研究者でそれぞれ考察・検討し、同意を得るまで討議した。

尚、本論中において、「命」と「いのち」という言葉が出てくるが、「命」は先行研究を引用の際に用いた場合や生物学的な表現を行う際に漢字を使用し、「人生」や「生活」としての意味合いで使用する場合はひらがなを使用した。

Ⅲ. 倫理的配慮

- 1) 本活動と、本活動に対する報告は、研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得て行われた。

(倫理番号 森ノ宮医療大学 2013-01)

- 2) アンケートは、匿名性の保護のために無記名で実施した。
- 3) 実施施設の学校長及び養護教諭に対し、活動報告として発表することを口頭にて説明し、同意を得た後に書面でも本報告についての同意を得た。

Ⅳ. 結果

1. 各 KJ 法図解における構造化について

講話後のアンケートは、それぞれの項目において、筆者が経験した講話後のアンケートの中では、今までには見受けられなかった命や生、性に対する感銘深い言葉や、「より良く生きなければ」という想いが様々な表現によって記述されていた。

それぞれのアンケート内容は、狭義の KJ 法におけるグループ編成を経て、いずれの図解もラベル群は 10 個以内のグループ (島) に統合されている。全体感を把握しつつ、島相互の関係を考慮して配置し、各島には「シンボルマーク」と呼ばれる概念を与えて島同士の関係を図 1 で示す関係線で図示した。

図解の中で、表札ラベルに表示されている「①」、「②」という数字は、ラベル作成段階を表示したものであり、「.」という表示は「一匹狼」と呼ばれ、各段階のラベル作成の際にグループに属さなかった 1 枚、もしくは 1 組だけを表示したものである。

2. 「生とは」(図 2 参照)

「生」を受けることは、理屈を超えた【奇跡】の【縁】があったからこそ、親に授けられ、母を媒介としてこの世に産まれることができた。この瞬間は、ポジティブな【感動の源】として周囲の人々を喜ばせる出来事である。

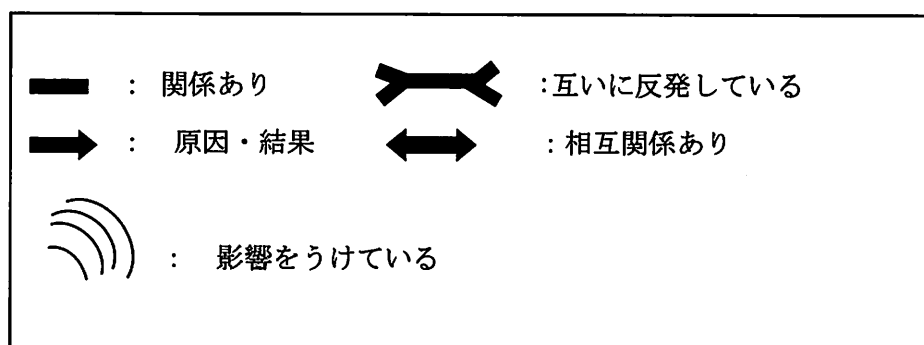


図1 関係線

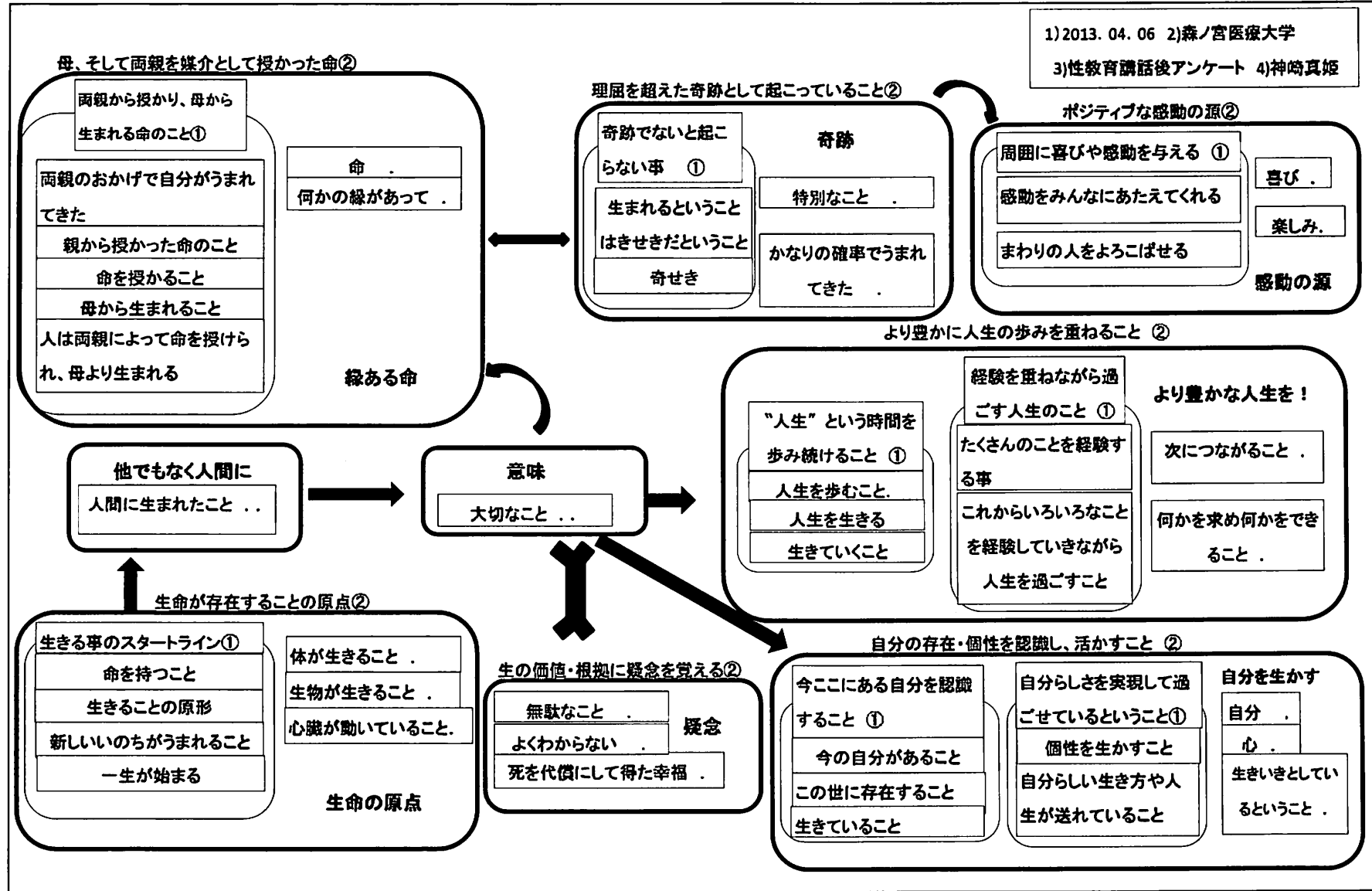


図2 結果「生とは」—図解—

生そのものを「大切なこと」と位置づけ、生物として【生命が存在する原点】であることや、まさに自分が【他でもなく人間に】産まれてきた【意味】を考える中で、自らの経験の中で、生の価値やその根拠に【疑念】を覚えることもある。

しかし、大災害を生き抜き、「今を生きる」自分たちが、震災という脅威の出来事を乗り越え、【自分を活かす】【豊かな人生を】送りたいという望みが表れた図解となった。

3. 「死とは」(図3-1, 図3-2 参照)

生きている限り【未知】なるものであるが、生命体としてこの世に存在する限り【不可避】なものであり、誰にでも平等に訪れる。

それは、個体の存在が【有から無へ】移行することを意味しており、有限性の期間の終わりだと認識するがゆえに、そこには不安や恐怖などのネガティブな【沸き起こる感情】が伴うことが多い。また、死を【次の生、世界】への通過点としても考えられており、「死があればこそ生の意味を大切にすべき」といった死の【重い意味】を受け止め、産まれたことに感謝する機会であると認識している。

しかし、震災によって起こった死は、いとも簡単に【奪われる意義】として、「あつげなさ」や「運がつきる」「人に忘れられる」といった人生を全うできないことに対する不条理感が表れていた。これは、どんなに一生懸命に生きていたとしても、大災害を前に人間は無力であり、いのちは簡単に奪われてしまうものである。

しかし、それが故に、人工妊娠中絶や自死などの自ら命を絶つことを選択する軽はずみな行動をするべきではないと表した言葉は、身近に命の意義の喪失を経験した対象者特有の想いが表現された図解となった。

4. 「性とは」(図4 参照)

「性」という概念は表現が難しく、【複雑】である。【一生を通じて】向き合い、関わっていかなければならないものである。

性行為としてみると、人が【誕生するための生殖のベース】であるが、心や身体で感じる【快の部分と影の部分】のように望まない妊娠や性感染症の罹患というリスクを併せ持つ行為であり、自他を大切にしている行動に【責任】を持たなくてはならない。

また、【性差】の存在を重く受け止めればこそ、【互いの心が生きる】ために他者性を意識した円滑な関係性を築き、自分らしい(【固有性】)生き方をも問い直そうとしていることが表れた図解となった。

5. 「生きたとは」(図5参照)

夢をかなえるために、自分たちが目指す場所に向かって前向きに乗り越えていくプロセスであるが、【望みと現実のはざま】で挑戦・苦楽・葛藤を味わう。しかし、自分たちが成長する上で、さまざまな経験の積み重ねがステップとなり心身ともに成長することができる(【成長へのステップ】)。

生命の営みは、生きている限りすべての生物が当然のようにおこなっているが、震災によって多くの死に直面したからこそ改めて【有限性】の認識をベースとして「今、ここにいる」すべてを【「奇跡」としての) 感受】し、命そのものだけでなく、日々の生活、自分の人生を大切に、いかに自分らしく、他者と共存しながらよりよく生きていくか、その追求への想いが表れた図解となった。

V. 考察

本報告では、「生とは」、「性とは」、「死とは」、「生きたとは」という4つの項目について、被災経験をした対象者がどのように捉えているのかを知るために調査を行った。

その結果、「生とは」、「性とは」、「死とは」、「生きたとは」の4つの図解を読み取った結果、それぞれの図解に共通して表現されていたラベルや島の表札が記されていた。

その内容は、「命には限りがあること」の他に、自分の存在や固有性について、「自分らしく」生きることへの表現、そして「命を堪能」や「共存と幸の追求」といった島からも受け取れるように、「より良く生きる」ことを追求する内容であった。

このことから、4つの図解を総合した結果、「有限の生」を「自分らしく」「より良く生きたい」という想いを持っていることが明らかとなり、4つの項目には関係性があることが見出された。各図解が示す内容について考察する。

1. 「生とは」

思春期の発達過程の特徴は、自分という存在全体

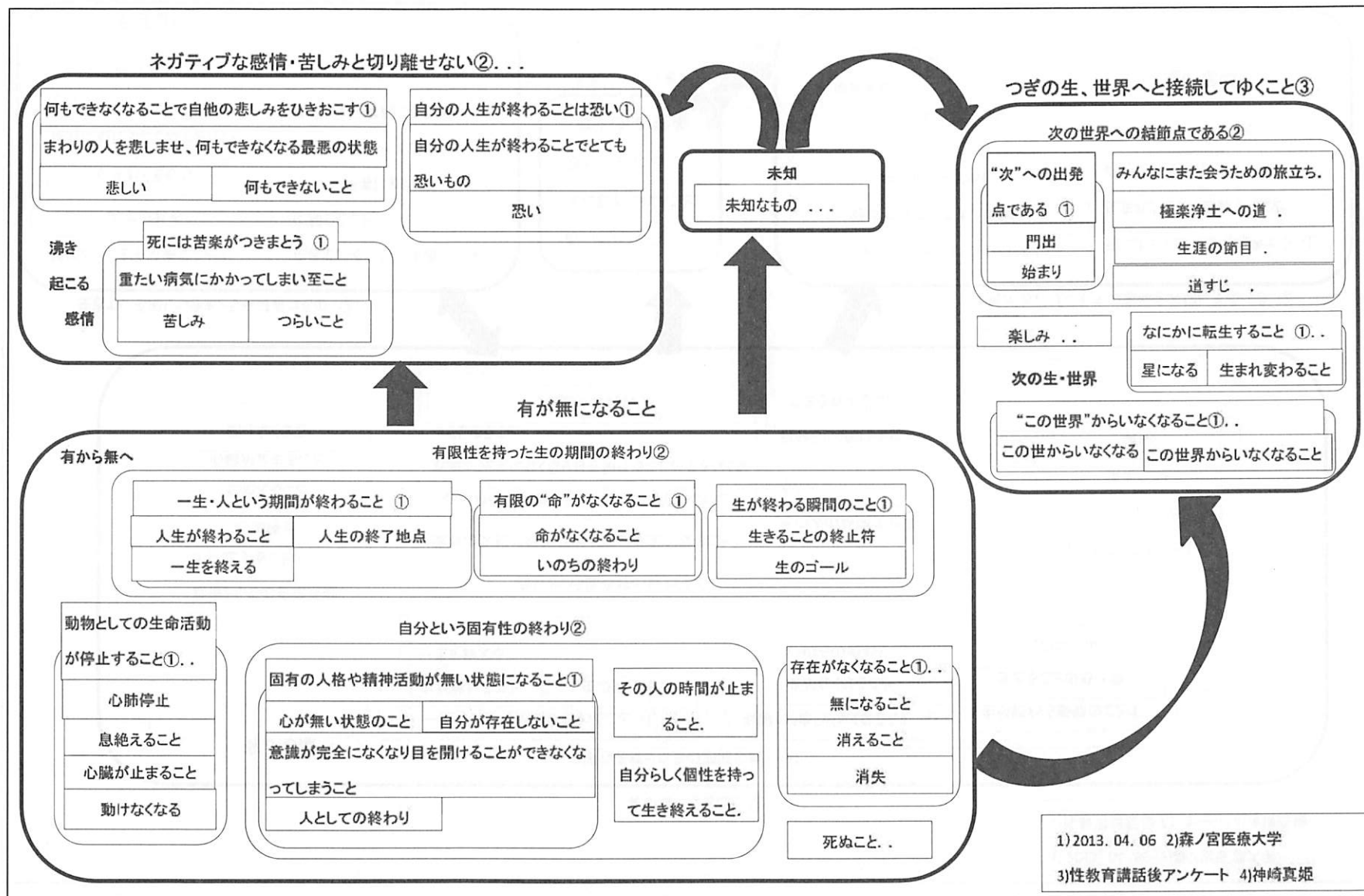
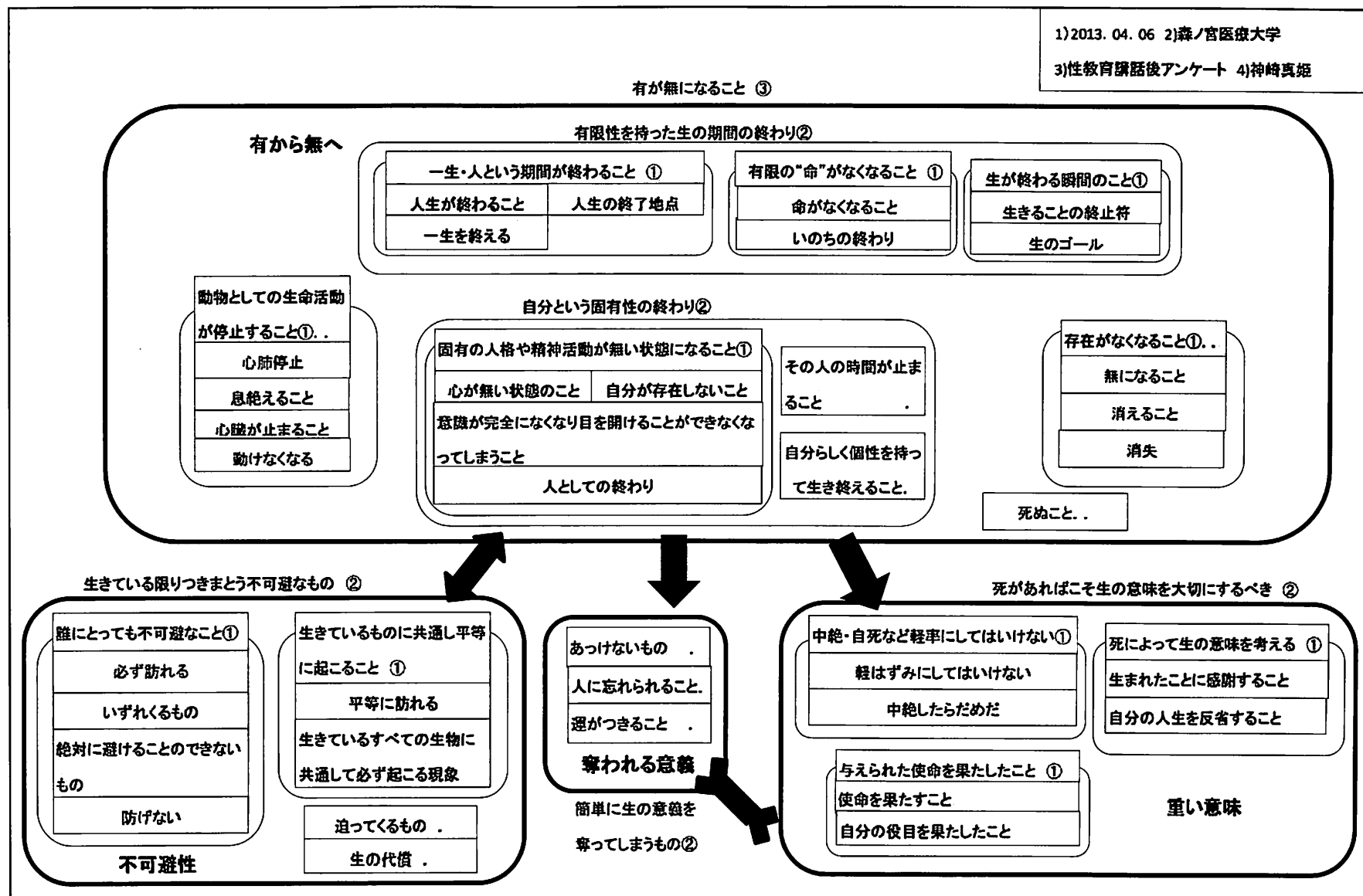


図3-1 結果「死とは」一図解一



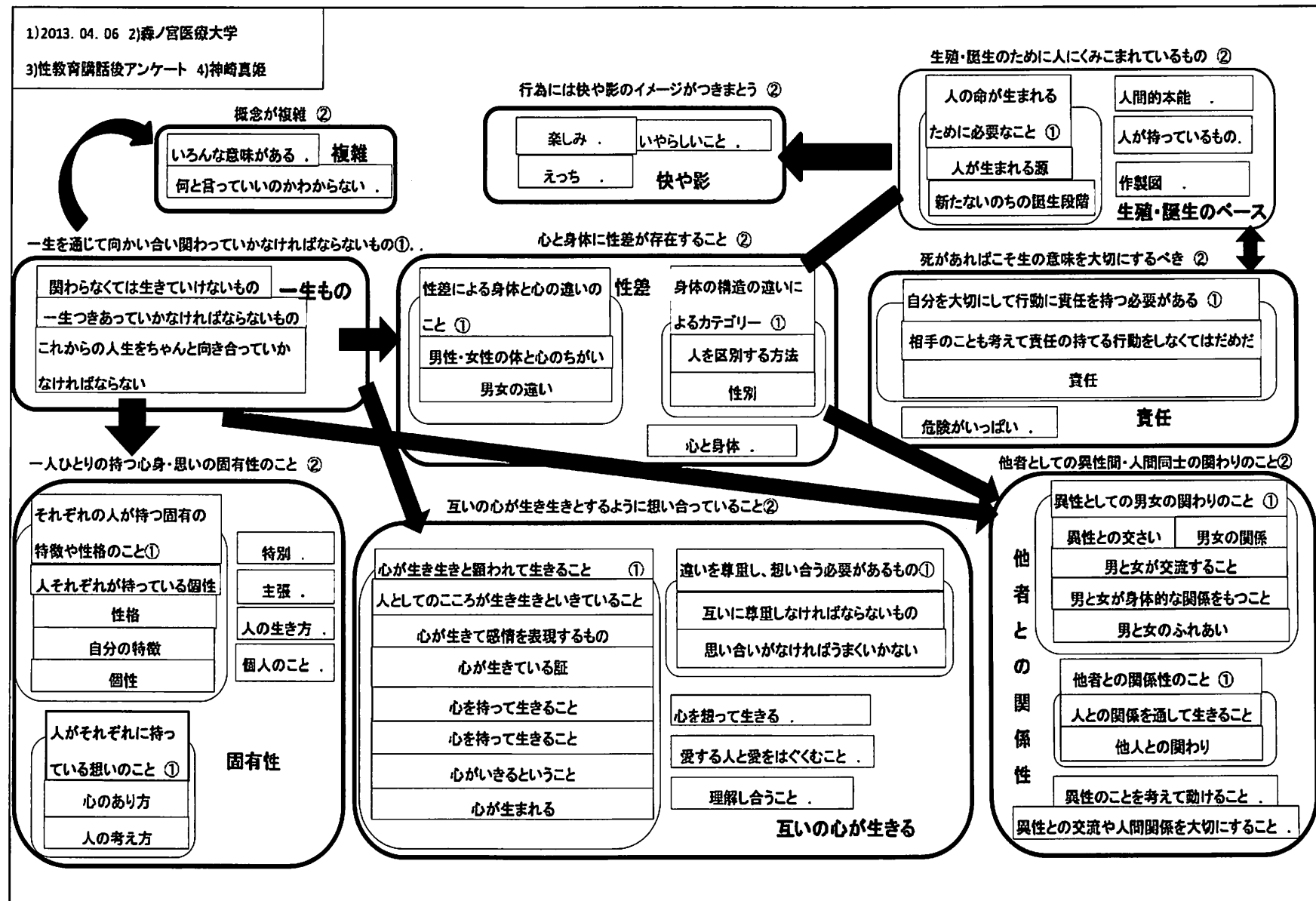


図4 結果「性とは」一図解

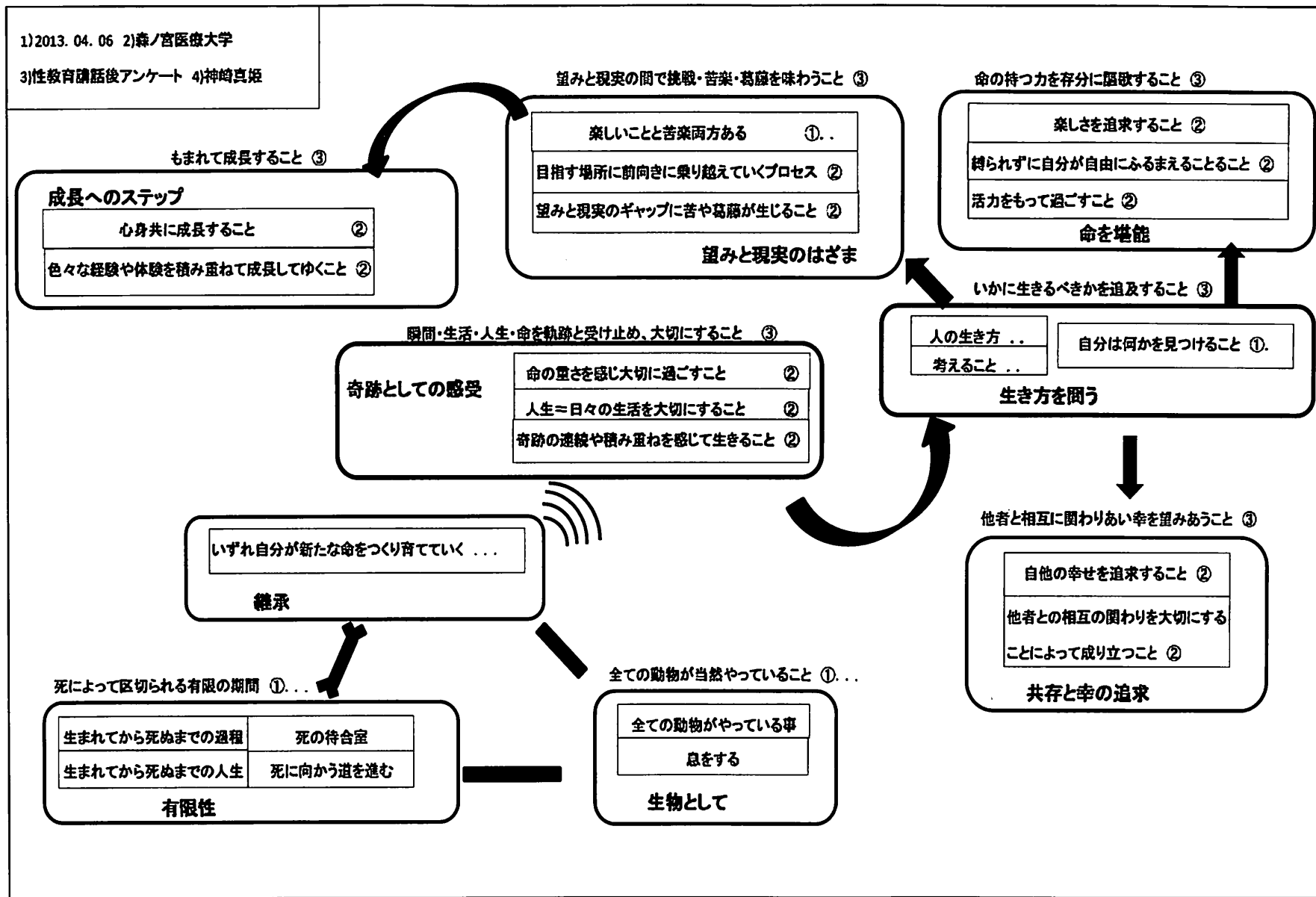


図5 結果「生きる」とは」一図解略図一

の中に自らを見つめ、価値観を確立していく時期である。これは、主観的に自らの生きる意味を考え、自分という存在は何者かを問い、考える時期であると言える。

しかし、対象者らは、生きる意味において、「死者を代償にして生きている」と、生存したことに対する自責を表現していた。

内見ら(2010)¹¹⁾は、阪神-淡路大震災に関する研究の中で重要他者の喪失体験は、思春期以降では感情の抑圧や否認といった反応がみられ、自責・後悔などの表現が特徴的であると述べている。被災体験は、多くの死に直面したことや環境の喪失体験から、自責の想いや「生の価値」について疑念を抱かずにはいられない想いが表れていると考察する。

Udwin Oら(2000)¹¹⁾は、震災後の初期の段階では、ライフイベントと社会的支援との関連が非常に大きく、PTSDの発症とその重症化には、災害規模の大きさや命の脅威が強い場合、数か月後に不安レベルが顕著に高くなることが予測されると述べ、災害後の思春期における子どもたちへの支援については、命の脅威や命についての想いを子どもたちが自由に表現できるような機会を設ける必要があると考える。

また、対象者は、生を受けることは奇跡の瞬間であると言い、「今、ここに生きている」という奇跡を起こしている自分たちが、被災体験を乗り越え、自分らしく、より豊かな人生を歩んでいきたいという願いを表現していた。城谷ら(2013)¹²⁾は、「困難な状況でも前向きな認知を持つことは抑うつ症状の回復に重要な項目である」と述べ、子どもたちが生活や命に対し、前向きに、健全に捉えられるような支援の継続が重要であると考えた。

2. 「死とは」

対象者は、死を、生きている限り決して経験することはないが、この世に生を受けた以上避けることはできないものであり、「怖い」「つらい」「悲しみ」「苦しみ」といった感情が表現されていた。

丹下(2004)¹³⁾は、死に対する態度の発達の変化について、「児童期前半に死の概念が成立するとともに人は死を襲えるようになり、青年期から死に対する恐怖が増加する」と述べ、小松(2000)¹⁴⁾は、青年期の死の捉え方の研究において、高校生は死を「悲しい」と情緒的な反応をしても「別れ」と捉えるもの

は少なく、「いなくなる、無になる」という捉え方であり、日本の現代青年が感じている死の悲哀は、自己の存在の消滅に向けられたものが強いと述べている。

対象者の図解は、同様に死を【未知】なるものとして情緒的な反応を示し、【有から無へ】という事象として捉えおり、丹下(2004)、小松(2000)の提言と一致した。

しかし、対象者は、【次の生、世界】へとつながる通過点とし、死者と「あの世」で再会するための区切りと捉えているようにも示され、この「輪廻」思想ともいえる観念的な表現は、大震災によって自分のいのちの脅威だけでなく、あまりにも多くの悲惨な死に直面せざるを得なかった彼らが、死者を尊重し、心に留め、再会を切望している表現とみることができた。

しかし、山本、岡本(2009)¹⁵⁾は、青年期の死の捉え方において、身近な人間の死は、ただ身近に死を感じるだけでなく、いずれは自身に起こることを想定し、自分の行動や考えを変化させる前向きな変化が起こる教育機能を持つと述べている。この主張と同様に、対象者は、「今、ここ」に生きる意味や与えられた生の役割、いのちに対する軽率な行動を慎むべきであるといった、いのちの大切さを認識する表現がなされていた。そして、いのちの脅威にさらされ、多くの死に直面した対象者は、その経験から生の意味や自分の生き方に対する問いをそれぞれが自らに向け、生存した自分の使命として「より良く豊かな人生を」送るために懸命に生きなくてはならないと客観的に自己を表現していた。

しかし、災害を経験した子どもたちの先行研究では、被災経験は長期間に渡り、思春期の子どもたちの精神的健康への影響として、抑うつ、不安、薬物乱用、集中力や学習の低下、睡眠に障害をもたらすことが明らかになっており^{2)~5)}、被災経験や死に直面した経験を前向きに変化させるためには、生活やいのちに対して健全な捉え方が出来るような支援を継続して行う必要があると考える。

3. 「性とは」

対象者は、「性」について、『人間が一生を通じて付き合うセクシュアリティの問題は多岐にわたり対象者らはその概念は非常に複雑で、表現が難しいものである』と表現している。

社会的な性としてだけでなく、「性行為」として性を見ると動物の本能としての生殖行為と、人間関係が持つコミュニケーションとしての性行為がある。その中で、より豊かに人生を生きるために、自分自身の在り方や生き方、健全な他者との関係性構築への想いに対する羞恥や性衝動に対して、表現することの難しさや感情抑制があり、対象者らの表現からは、今後予測される性行動を特徴づける共通点を見出すことは困難であった。

有菌 (2008)⁶⁾ や アメリカ国立 PTSD センターのガイドラインである「サイコロジカル・ファーストエイド」⁷⁾ は、震災後の生活の適応過程で、思春期の子どもたちの中には災害後に心理的に不安定な状態から無防備な性行動を取ることがあり、性に対する支援の必要性を示唆しており、「性」に対する認識や性行動への影響や変化を観察する必要がある。

さらに、健全な性の捉え方が出来ることや、危険な性行動を回避するための選択ができるように、機会を設け、発達段階に応じた性に対する正しい知識を提供することが重要であると考えます。

4. 「生きるとは」

対象者らは、『目標や夢をかなえるために、自分たちが目指す場所に向かって進んでいくプロセスであり、自分たちが成長するうえで様々な経験の積み重ねが成長につながる』と表現している。

長谷川 (2013)¹⁷⁾ は、大災害などの生命の危機に直面するトラウマティックな体験をした後に PTSD を発症する人がいる一方で困難な状況からその壁を乗り越え、成長していく「心的外傷後成長 (Post Traumatic Growth: 以後 PTG と略す)」を遂げる人々がいると述べている。対象者の表現はネガティブな経験も成長へのステップであると前向きに捉えており、一致した状況を示している。

また、山本、岡本 (2009)¹⁶⁾ は、身近な人の死に接することは、それ自体が教育機能を持ち、自分の生き方を変えていく契機になると述べており、更に、「生きること」への姿勢は、死別、病、事故に関わらず、大きな影響を受けると述べている。そして、「生きる」という進行形について、対象者は、「生命の営みは、いのちの継承も含めて生きている限りすべて有限性のものである」と認識している。そして、生命の誕生、

「今、ここに生きているという現実が奇跡」と表現している。このような表現から、いかに生きるべきかと自問する姿勢、生活や人生を大切に生きていかなければいけないという想いの表現は、山本、岡本が述べる意見と一致しており、被災経験をした対象者ならではの想いが表現されていると考えた。

VI. まとめ

結果より、「生とは」、「死とは」、「性とは」、「生きるとは」という4つの項目から、対象者らは、それぞれの項目がお互いに関係性を持ち、発達段階に応じた認知反応を示すとともに、被災経験者特有の反応を示していることを見出した。

被災経験をした思春期にある子どもたちには、家庭環境や生育歴、教育によっても主観的な認識は異なり、成長発達への影響はさまざまであることから、子どもたちの個別の背景を理解した上での支援は非常に重要である。

また、長期間に渡り、いのちや生活、性に対する健全な捉え方が出来るような知識の提供と共に、家族支援や様々な場面で、子どもたちの想いを表出する機会を設けるなどの支援を継続して行うことが必要である。

本報告において実施した調査は保健講話後であったために、講話が与えた影響は否定できない。今後も、思春期の被災経験者の生や死に対する想いに対し、文化、社会的文脈の中で、継続的に言葉を捉え、彼らの生きるフィールドの中で理解しようとする試みは、本質的かつ具体的な支援の必要性を見いだすために重要であると考えます。

また、本報告の結果から、被災経験というネガティブな体験を通して、思春期の子どもたちが困難な状況に立ち向かう力を身に付けているポジティブな側面についても明らかにする必要性を認識した。

謝 辞

本報告をまとめるにあたりまして、ご協力くださいました皆様に深く感謝いたします。

東日本大震災でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、一日も早い被災地の復興を祈念いたします。

引用文献

- 1) Udwin O ,Boyle S,W.Bolton D,O’Ryan D:Risk factors for long-term Psychological effects of a disaster experienced in adolescence:predictors of post traumatic stress disorder.J Child Psychiatry Nov;41(8), 969-79,2000
- 2) Stein MB ,Walker JR ,Hazen AL ,Forde DR:Full and partial posttraumatic stress disorder .Findings from a community survey,American Journal of Psychiatry ,154:1114-9,1997
- 3) Creamer M ,Burgess P ,McFarlane AC: Post-traumatic stress disorder :findings from the Australian national survey of mental health and well-being, Psychological Medicine,31:1237-47,2001
- 4) Narrow E ,Rae DS,Robbins LN ,Regier DA : Revised prevalence estimates of mental disorders in the United States,Archives of General Psychiatry,59:115-23,2002
- 5) Giaconia RM , Reinherz HZ , Silverman AB ,Forest AK , hen E: Traumas and posttraumatic stress disorder in a community population of older adolescents, Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry ,34:1369-80,1995
- 6) 中村肇:大規模災害から子どもを守る, 小児保健研究 ,62(2); 131 – 136,2003
- 7) Kessler RC , Sonnega A,Bromet E ,Hughes M ,Nelson CB : Posttraumatic stress disorder in the National Comorbidity Survey, Archives of General Psychiatry, 52:1048-60,1995
- 8) 有蘭博子:阪神・淡路大震災後の思春期の心の問題, 思春期学 ,26(2);198-207,2008
- 9) 兵庫県こころのケアセンター (訳),National Child Traumatich Stress Network National Center for PTSD(原著):サイコロジカル・ファーストエイド 実施の手引き第2版 :2009
- 10) 副田義也,檜川典子,藤村正之,震災遺児家庭の震災体験と生活実態一平成 8 年度調査結果報告 -,あしなが育英会,東京, 1997
- 11) 内見紘子,山川真裕美,喜多淳子,藤澤正代:被災時の子どもの心理反応および必要とされるケアー『心のケア 4 原則』の検討を含めてー大阪市立大学看護学雑誌, 第 6 巻 :35 – 46,2010
- 12) 城谷圭朗,中野明德,齋藤高雅,丹羽真一:抑うつ症状の回復過程におけるレジリエンスの役割ー心身医療科の患者を対象にしてー,臨床精神医学 ,42(7);899 – 907,2013
- 13) 丹下智香子:青年前期・中期における死に対する態度の変化,発達心理学研究, 第 15 号 (1);65-76,2004
- 14) 小松万喜子:日本の現代青年の死生観とその教育課題,仏教大学大学院紀要, 第 28 号 ;99-114,2000
- 15) 内田雅子,中丸澄子:青年期および中年期の死の捉え方 - 自己の消滅・他者との別離の視点から -, 心理教育相談センター年報, 第 16 号 ;69-76,2008
- 16) 山本彩留子,岡本祐子:青年期における親の「死」に関わる危機の捉え方とその課程に関する研究,広島大学心理学研究, 第 9 版 ;229-245,2009
- 17) 長谷川啓三,若島孔文 (編):震災心理社会支援ガイドブック 東日本大震災における現地基幹大学を中心とした実践から学ぶ, i - iv金子書房, 東京 ,2013